

## 『更級日記』の竹芝伝説をめぐる

— 作者の東国故郷意識との

関連を中心として —

工藤進思郎

## 一

『更級日記』によれば、当時まだ十三才であった菅原孝標女が、任果てた父に伴われ、憧れの都を目ざして上総の国府を後にしたのは、寛仁四年（一〇二〇年）九月三日のことであった。「京にとくあげ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と、等身の薬師仏まで作って祈らずにはいらなかった彼女にとって、この日を迎え得た喜びはいかばかりであったろうか。それから三カ月にも及んだ上洛の旅は、もとより苦しい行程であったにしても、一方では、いよいよ物語へのわが「ゆかしさ」がかなえられるのだという、期待と歓喜に満ち溢れたものであったに違いない。

そのような孝標女が、この長途の旅において、はからずも耳にした国々の伝説や説話に対し、深い共感を覚えたであろうことは、これまた想像にかたくないと言わねばなるまい。

後年、この旅の思い出を書き記した『更級日記』の東海道上洛の記とも称すべき部分に、下総の国の「まの」の長者伝説、武蔵の国の竹芝伝説、駿河の国の国司予告説話が見えているのは、晩年の回想において、これらの話が、作者の心に忘れがたい印象をとどめていた事実を物語るものにほかならない。

本稿では、これら三つの話のうち、ずば抜けて長く、かつ最も生き生きとした筆致のうかがえる竹芝伝説を取り上げ、『更級日記』の作者によって、この伝説が丹念に書きとめられたことの意味について、いささか考察を加えてみたい。

## 二

いわゆる竹芝伝説は、当時、武蔵の国にあった竹芝寺のいわれを語る話であるが、後世の説話集の類にもまっ

たく採録されることなく、『更級日記』によってのみ、今日に伝えられた東国の一伝説として注目される。日記の記述にしたがって、まずその概要を述べておこう。

——昔、武蔵の国から、宮中の火焚屋の衛士として差し出されていた男が、ある日、御前の庭を掃除しながら、「などや苦しきめを見るらむ、わが国に七つ三つつくりすゑたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見て、かくてあるよ」とつぶやくのを、時の帝の姫宮が立ち聞きたことから、この話は急速に展開していく。「いとあはれに、いかなるひさごの、いかなびくならむと、いみじうゆかしく」思った姫宮は、みずから御簾を押し上げて衛士の男を召し寄せ、「いひづること、いま一かへりわれに聞かせよ」と所望する。そしてもう一度、その独白を聞くや、「我ゐて行きて見せよ。さいふやうあり」と男に命じて、ついにその背に負われて宮中を脱け出し、酒壺の「ひさご」の柄杓が風になびくという東国へ下って行った。

一方、都では、帝も后も、「御子失せ給ひぬとおぼし

まどひ、求め給ふ」のだが、折から「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける」と申し出る者があった。七日七夜で武蔵の国に到着したという衛士の男の超人的なスピードと、姫宮の高貴な美しさを巧みにとらえ得た言葉である。

それはともかく、三カ月もかかって武蔵の国に行き着いた朝廷の使者は、ようやく衛士の男の家を尋ねあてたものの、「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、ゐて行けといひしかばゐてきたり。いみじくここありよくおぼゆ。このをのこ罪しれうぜられば、我はいかであれと。これもさきの世にこの国にあとをたるべき宿世こそありけめ。はや帰りておぼやけにこのよしを奏せよ」という姫宮の力強い言葉に接すると、下す手もないままに、むなしく都へ引き返さねばならなかった。使者からこの由を伝え聞いた帝は、もはや姫宮を取り返すことを諦めて、終生、竹芝の男に武蔵の国を預けとらせ、朝廷に対する租税や賦役をも免除した。そして男の家を内裏のごとくに造って姫宮を住まわせたのだが、その死後、この家を寺にしたのを竹芝寺と言うのである。

姫宮が生んだ子は、そのまま武蔵という姓を賜った。

こんな事件があつてから後、宮中の火焚屋には、女が仕えることになったのである。――

ところで、このような内容を持つ竹芝伝説から、たとえば、「つらい衛士役からの逃亡がかえつて最大の成功・致富となる、というふうに語り伝えていく民衆の心理」<sup>(2)</sup>を読みとる、益田勝実氏のような見方もできるであろう。この話自体は、苦しい都の宮廷勤めをかこつ衛士の男の逃亡譚として、民衆によって形成され、語り継がれてきたものであるに違いないからである。しかしながら、上洛の旅の途次、武蔵の国でこの伝説を耳にした時の孝標女の聞きとり方は、決してそのようなものではなかったと言わねばなるまい。かねがね姉や継母から、「その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど」を、ところどころ伝え聞き、そういう優美な物語世界への「ゆかしさ」をつのらせていた彼女にとって、その関心はもとより衛士の逃亡ということにはなく、ロマンティックな愛に生きる高貴な姫宮に向けられていたことであらう。

そして、都の物語からそのまま抜け出て来たかのようなこの伝説の姫宮によって、さらに物語への憧れの心を激しく掻き立てられたに違いない。

清水文雄氏は、その点に触れて次のように述べられたことがある。<sup>(3)</sup>

直接この伝説が「京」につながる物語であるため、「京」への憧れ心が之を捉へたといふばかりでなく、「物語」といふ美しい「夢」をあこがれての道行の途中、はからずも語られたこの伝説に、彼女のあこがれの心を燃焼させたものでもあつたらう。いかにも無心らしく「と語る」と結んで挿入されたかういふ一箇の伝説のとり入れ方にも、この作者のあこがれの姿勢の美しさが光つてゐるのである。

武蔵の国人が語るこの話に、目を輝かせながら熱心に聞き入つたであらう、その時の孝標女の心中は、ほほこのようなものであつたらうか。それにしても、こうした伝説をその晩年に改めてとり上げ、『更級日記』の中に書きとどめた作者の気持は、必ずしもそのようなものではなかつたはずである。終始、語り手の直接話法形式で

記され、作者自身の感想めいた言葉がいつさい書かれて

いないのも、聴取時と執筆の時点における、この話に対する孝標女の反応の違いによるものなのかもしれない。

それはともかく、竹芝伝説について、そうした問題を考へる場合、姫宮と衛士の男が都から東国へ向けて下ったその方向と、孝標女の上洛の旅の方向とは、ちょうど逆であることが注目される。この伝説を聞いた時の孝標女は、そのような点には何のこだわりもなくこの話に感動したことであろうが、晩年の作者にとって、竹芝伝説が都から東国へ下った姫宮の話であったということは、重大な意味を持つ事柄でなければならなかった。

それでは、『更級日記』執筆時の作者が、竹芝伝説に寄せた関心とは、いったいどのようなものであったのだろうか。次に、そうした観点から、もう一度、この伝説を読み直してみることになろう。その際、竹芝伝説だけを考察の対象とするのではなく、その前後の記事に対しても、注意深く目を向けることが大切であるの言うまでもない。それらの記事との関わり合いを抜きにして、『更級日記』における竹芝伝説の持つ意味をさぐり出す

ことは、とうてい不可能だからである。

### 三

竹芝伝説を聞くことができた武蔵の国の旅の思い出を、作者はまず次のように書き記している。かつて伝説の姫宮が住みついた所だとされる、竹芝寺一帯の景観に触れた記事である点を注意したい。

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所と見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、中をわけ行くに、竹芝といふ寺あり。

上洛の旅の途次、孝標女の目に映った武蔵の国の実景が、まさにこのようなものであったのは争えないにしても、『砂子白くなどもなく、こひぢのやう』な浜や、『むらさき生ふと聞く』武蔵野の意外なありさまが、とり立ててここに記されたのは、なぜであろうか。そのような浜や野は、少女時代の旅の思い出としてわざわざ書き残すにしては、一見奇異の感を免れがたいものだと言わ

ねばなるまい。どうもこの一節には、武蔵の国の印象として、「ことにをかき所も見え」なかつた由を、ことさらに強調したような趣が感じられる。むらさき草で名高い武蔵野も、実際には、見わたすかぎり「蘆荻のみ高く生ひ」茂った、荒野のごとき所でしかなかったと言っているのであるが、そこには、「むらさきの一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(『古今集』雜上)などの歌によって、当時の人々にこよなく親しまれていた歌枕としての武蔵野のイメージを、むしろ打ち消そうとする積極的な意識が働いているのではあるまいか。歌枕に対する興味が、都人の「みやび」の意識に関わるものであるとするならば、これは純粹に東国的なものを強調しようとする、この作者の姿勢を打ち出したものと言えるであらう。(4)

武蔵の国の「実景」をこのように紹介した作者は、次にいよいよ竹芝伝説について書きはじめることになる。それは、あたかも伝説の姫宮が、右のような武蔵の国の一角に、『更級日記』の作者によって送り込まれるような結構を示したものと見て注目される。それでは、姫宮

が憧れた東国とは、どのようなものであったのだろうか。彼女の好奇心をそそった衛士の男のつづやきを、もう一度かかげてみよう。

「などや苦しきめを見るらむ、わが国に七つ三つくりするたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見て、かくてあるよ」

ここには、「などや苦しきめを見るらむ」「かくてあるよ」と、宮中での苦役をかこつ言葉が見えているにもかかわらず、それは必ずしも強い響きを伝えるものではない。衛士の男の「かがやかしい逃亡」に主眼を置いて、この伝説をとらえた益田勝実氏も、「かれの口から洩れ出るそのリズムの楽天性」を指摘されている。(5) そうした民謡ふうな快い口調によって、何よりもくっきりと浮かび上がってくるのは、風のまにまに自在になびく「ひさご」の柄杓の鮮やかな形象である。「いかなるひさごの、いかなびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ」と記されているように、姫宮の関心が、もっぱらそ

のような「ひさご」に向けられたのは言うまでもない。衛士の男を召し寄せて、再度その独白を聞いた姫宮は、即座に「我ゐて行きて見せよ。さいふやうあり」と男に命じ、ついにその背に負われて宮中を脱出することになるのだが、そうした姫宮のひたむきな行動は、宮廷の奥深く多くの侍女にかしずかれて育ったこの皇女にとって、酒壺に浮かんだ「ひさご」の柄杓が自在になびくという光景によって象徴される、いかにものどやかな東国的世界が、強烈にその心をそり立てるものであったことを示していよう。竹芝伝説の主題が、「皇女という貴族の、禁中という束縛された世界よりの脱出、自由さへの意向」という点にある<sup>(6)</sup>と言われるのも、決して故なきことではない。

このような姫宮が住みついた所とされる武蔵野の「実景」を、多くの都人の心を誘う歌枕としての武蔵野とは何のゆかりもない、草深い東国の片田舎として、伝説に先立って紹介した作者の周到さに注目しなければならぬ。それは、朝廷の使者に対して、「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、ゐて行けといひし

かばゐてきたり。いみじくこゝありよくおぼゆ」と、この地の「ありよ」さを説いた姫宮の力強い言葉とも、みごとに照応する東国的世界だからである。

それにしても、四十年前も前に聞いた竹芝伝説を、作者がその晩年において、新たな感動をこめた筆致で生き生きと再現してみせたのは、なぜであろうか。それは、かつて多感な少女時代を送った東国への懐しさが、伝説の姫宮に対する強烈な共感を、改めて作者の心呼び起こしたからであるに違いない。「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひいでたる人、いかばかりかはあやしかりけむを」と、『更級日記』の冒頭に記された自己規定の言葉に、作者の「田舎者コムブレックス」、すなわち「東国人としてのインフエリオリティ・コムブレックス」を読みとられたのは野村精一氏であったが、孝標女の持つこうした劣等意識は、みずからを東国育ちであるとすする強固な自覚と、そのような自分にとって、魂の故郷とも言うべき東国に対する憧れの気持を、その心に深く植えつけることになったと考えられる。そのような作者にとって、竹芝伝説の衛士の男の独白は、東国へ

の懐しさを強くそそり立てる言葉であつたし、また、都から来た帝の使者に、「いみじうこゝありよくおぼゆ」と、きっぱり言い切った姫宮の言葉は、何よりもよく自分の氣持を代弁してくれるものとして、深い感動をおぼえずにはいられなかつたはずである。

須田哲夫氏によって説かれたごとく、「宮中の束縛的な生活への作者の感慨並びに暗い絶望的な現実よりの離脱の心が、この皇女脱出という「竹芝」伝説に共感執筆させた一要因をなしていた」というような事情も、もとより見のがすわけにはいかない。けれども、それだけでは、とくに東国を憶れて都を脱出したという、この伝説の指示す方向に対する作者の共感の強さを、じゅう分に説明し尽くすことはできないであらう。孝標女が、都の

「みやび」の世界を代表する宮仕え生活に遂に馴れめなかつたのは、東国育ちであるという劣等意識に基づくところがある。それが少なくないことに注目しなければならぬ。そのような孝標女の東国意識を導入して考えるのであれば、言われるような「宮中の束縛的な生活への作者の感慨」が、ことさら東国という方向を志向する契機は生ま

れて来なかつたと思われるからである。また、晩年における孝標女の「暗い絶望的」な境涯の中で、「自己の現実よりの離脱の心」がつのつてきた事実は重要であるにしても、そのような心が求めた方向として、いわば東国という故郷があつたことを忘れてはならない。老残の身に寄せる孤独と寂寥の境涯において、ますます掻き立てられる東国への懐しさ、さらに言えば、時間的にも空間的にも、今や遠く隔てられてしまつた東国との別離意識こそ、上洛の旅の途次に聞いたこの伝説を、作者の心に鮮やかによみがえらせた主要な契機をなすものであつたと言えよう。

#### 四

竹芝伝説を記し終えた作者は、その後に、次のような一節を書き加えている。ごく短かい記事ではあるが、いわゆる業平の東下りに言及した叙述として注目される。

野山、蘆荻のなかを分くるよりほかのことなくて、  
武蔵と相模との中にあてあすだ河といふ。在五中将  
の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。中将



の集にはすみだ河とあり。舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。

「すみだ河」を「あすだ河」と記し、その位置についても「武威と相模との中」とした、この記事に見える二重の誤りについては、以前から多くの疑義が提出されており、未だ解決を見るには至っていない状態であるが、ただ前者の問題に關して言えば、「あ」を衍字と見て「すだ河」(「すんだ河」||「すみだ河」)とするよりも、「あすだ河」と聞き覚えていたのを、作者がそのままに記したと考える方がむしろ適切なのではあるまいか。一方、「すみだ河」の名が、作者もここに引いている業平の歌、「名にし負はゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(「古今集」旅、「伊勢物語」、「業平集」等)の一首が詠まれた場所として、広く知れわたっていたのは言うまでもない。ところが、それ以外、業平のこの歌とは言わば無関係に、隅田川に触れた文や、その名を詠み込んだ歌は、当時においては、まだほとんど現われていなかったもののようである。<sup>(10)</sup>『更級日記』の作者が、「中將の

集にはすみだ河とあり」という一文を書き添えて、「あすだ河」とする自分の記憶に、今なお固執しているように見受けられるのも、そうした事情によるのかもしれない。それにしても、「中將の集」に「すみだ河」とある著名な事実を知りながら、あえて作者がそれに従わなかったのは、なぜであろうか。こうした問題について、「東国の地名の誤りに固執するのも、作者が地理に無知だったからではない。故郷としての東國を、そうしたかたちで心の深奥に温存・銘記せざるを得なかった作者の意識をこそ思い致すべきであろう」という、新たな提言がなされていることに注目しなければならぬ。みずからを東國育ちであるとする作者の強固な自意識が、そこに働いているもののように思われるからである。

ところで、右の一節において重要なのは、「身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり」と、<sup>(12)</sup>「伊勢物語」(第九段)に記されているような、いわゆる業平の東下りについて、とくに言及された点でなければならぬ。「業平の歌語り」が、言われるように「貴族的な情感を前提とし



ての伝説説話」であることは、もとより争えない事実である。しかしながら、業平の東下りにここで作者の筆が及んだのは、必ずしもそうした「情感」への関心のみによるものとは思われない。竹芝伝説の記事に続いて、このような一文が見えることに注目するならば、「住むべき」安住の地を、ことさら「あづまの方」に求めて下って行った業平に対する関心は、やはり竹芝伝説に寄せた作者の深い共感と同質のものであったと考えてよいのではあるまいか。すなわち、それは作者自身の東国への憧れの心、いわば東国故郷意識をそそり立てる話として、とり上げられたのであるに違いない。業平の東下りに触れた記事を、とくにここに書き加えたことの意味は、しかし、それだけにとどまるものではない。東国を憧れて都を脱け出したのが、決して竹芝伝説の姫宮のみではなかったのだということを、強調するためであったのを見落としてはなるまい。そこには、人口に膾炙した業平の東下りについて書き記すことによって、武蔵の国の一伝説に限りない共感を抱くわが心の真実を、強く訴えようとする作者の積極的な姿勢を読みとることができるであ

ろう。当時、下総・武蔵両国の境をなしていたはずの「すみだ河」の位置を、「武蔵と相模との中」と書いてしまったのは、たとえ「業平集・伊勢物語に対する執筆時の記憶違いである」にしても、このように竹芝伝説の言わばだめ押しとして、業平東下りの語を持ち出し、それによって武蔵の国の旅の記事を結ぼうとした、作者の構成意識を無視することはできないはずである。

『更級日記』の作者は、武蔵の国の旅の遠い思い出を書き記すにあたり、東国故郷意識をそそり立てる竹芝伝説を中心に据えて、その前後に、これと密接に関わり合う記事を配し、そこにわが共感を打ちこめながら、改めてこの伝説を鮮やかに再現することに成功したのである。こうした周到な構成によって、武蔵の国の旅の記事が、作者自身の抱く東国への憧れを、強く謳い上げた部分となったことに注目しなければならない。『更級日記』が、「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひいでたる人」の、東国への訣別を告げる記事によって書き起こされたことの意味も、作者のそのような東国故郷意識、さらに言えば、故郷として東国との別離意識を抜きにし

ては、とうてい理解しがたいからである。

注

- (1) 本文の引用は、西下経一氏校注『更級日記』(岩波文庫、昭和三十八年)による。以下同じ。
- (2) 益田勝実氏『説話文学と絵巻』(古典とその時代Ⅴ、昭和三十五年)二八ページ。
- (3) 清水文雄氏『女流日記』(文芸文化叢書6、昭和十五年)一六一―一六二ページ。なお、同氏の近著『王朝女流文学史』(古川叢書、昭和四十七年)第四章「菅原孝標女」にも、ほぼ同趣旨の説明が見える。
- (4) 『更級日記』に見える東国の歌枕のとり上げ方については、拙稿「『更級日記』に関する一考察」——上洛の記に見える地名とその記事をめぐる——(『金城学院大学論集』国文学編第十五号、昭和四十七年十二月)において、歌枕以外の地の扱い方と対比しながら検討しているので参照していただきたい。
- (5) 益田勝実氏前掲書(2)二六ページ。
- (6) 須田哲夫氏「更級日記作者の人間像について」——日記に記載する伝説を中心に——
- (7) 野村精一氏「源氏物語と更級日記」——物語リアリズムの解体——(『国語と国文学』昭和三十一年八月)。なお、同氏の後続論文「更級日記」(久松潜一・西下経一氏監修『平安朝文学史』所収、昭和四十年)は、その一部に竹芝伝説にも触れた論述を含む好論として注目される。
- (8) 須田哲夫氏前掲論文(6)
- (9) 宮田和一郎氏『更級日記精講』(昭和三十三年)八〇―八三ページに、真淵の『伊勢物語古意』以下、この問題に触れた諸説が紹介されている。
- (10) 前掲拙稿(4)参照。
- (11) 菊田茂男氏「更級日記——主題の把握——」(『国文学』昭和四十五年七月)。
- (12) 引用は、大津有一氏校注『伊勢物語』(岩波文

庫、昭和三十九年）による。

- (13) 阿部秋生氏『評釈更級日記』（昭和四十二年）  
九〇ページ。

- (14) 大養廉氏「更級日記臆断」（北海道大学『国語  
国文研究』第十七号、昭和三十五年十月）。

1 金城学院大学助教授・本学第六回卒業1